月刊
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあん
4
〈EKUTEBIAN-VOL.7.APRIL.1990-EKUTEBIAN〉
まいあーと■押花
「花帽子の少女」by 伊藤 令

妙なる響きに

上村康司さん＊ホルン
築地の魚河岸、第一線のバリバリは「中外食品」の営業部主任。どんなに飲んでも一日一回はホルンを鳴らなけらば気がすまない。

古谷美穂子さん＊ヴァイオリン
薬剤師で「山下薬局」（曙町）勤務。しかも二児の母親、その上の音楽活動はアッパレ。

『立川管弦楽団』は1978年、立川高校室内楽部OBが中心になって結成され、いまやアマチュア楽団としては日本でも屈指の存在にまで成長してきた。それぞれが、それぞれの職業を持ちながら、だが、管弦楽のためとあらば心ひとつにして結束。「妙なる響き」はひとりひとりの汗の結晶とも云える。管弦楽は人生上のハーモニーでもある。

田中　純さん＊ファゴット
立川管弦楽団代表。順心女子学園（東京・港区）で英語の先生をしている。英語主任という重責の上に、楽団の責任者もこなす。

唐木幸子さん＊フルート
医学研究所で免疫学を研究している。アカデミックな表情にフルートがよく似合っている。

春爛漫のこの街に
妙なる響き渡るとき
われらが心おどるとき
管の音やら弦の音

きみの心に響くもの
わたしの心に響くもの
タクトの先に託してぞ
妙なる響き託してぞ

ムジカ・フェスタに 立川の歴史もりこむ

「テプコ・ムジカ・フェスタ」（立川市合唱連盟コンサート）が2月18日に開催され、今年で3回目。敗戦後の息苦しい時代から未来に夢はせるロマンまでを、スライドを駆使して表現した新しい試みに会場は涙と笑い。そして、フィナーレはあの懐かしい「リンゴの唄」でしめくくった。

新企画は「ふるさと／四季／街の笑顔」のタイトルで歌われた。

B29の爆音。音響効果とあわせてスライドで、立川の焼けただれた街まちが写しだされる。ひとりの老人がステージ中央でモノローグ。立川で生まれ育った老人という設定。彼は敗戦の焦燥にかられた青春時代の思い出を淡々と語りはじめる。モノローグにはさまれて、合唱が続く。第一景「東京シューシャインボーイ」、第二景は「戦争の子どもたち」、第三景は「鐘の鳴る丘」（以上、コール・わかば）と続いてゆく。

会場は徐徐に時代の色に染まってゆく。第四景「東京キッド」を歌うコーラスサルビアはその歌声もさることながら、アメリカ兵や靴みがきの少年に扮して、風俗表現にまで工夫をこらしての熱唱で、会場をわかせた。

熱演の「東京キッド」はコーラスサルビア

ステージは次第に平和の色濃く「森の水車」（上野敦子さん）、「雪が降る」（境敬彦さん）の独唱が加わり、永遠の平和を願う気持ちが高まるなか、第十景にさしかかる。

合唱連盟では「3回目を迎えるフェスティバルに新風を吹き込みたくて、演出家の津野幸子さん、それにモノローグが重要な役目を果たすので俳優の剣持伴紀さんに特別出演していただいたのが成功の原因だったと思います。次回はこれをバネにもう一段、飛躍していてすね」と、うれしそう。

それに、ややもすればナツメロソングに終始してしまいがちな選曲を、それぞれの合唱団が工夫をこらして、単なる懐古趣味に陥らなかったことであろう。

第十景ではステージ狭しと合唱団がのぼり、会場の聴衆がその声に和して「リンゴの唄」の大合唱となった。

これは立川飛行場とリンゴの木にまつわるエピソードに由来するもの（3月号「工房から」参照）で、「赤いリンゴにくちびるよせて、だまってみている青い空」の歌声が老若をこえて、市民会館のホールいっぱいに響きわたって、いかにもフェスティバルにふさわしい雰囲気をかもし出し、味わっていた。

見事な「ふけ役」ぶりの剣持伴紀さん

ぐるり立川

大雨の中を出かけた。本堂まで石畳が通じているから、泥んこにこそならなかったが、傘の横から雨が細い糸をまき散らす。

立川の南口、旧の奥多摩街道を少しわきに入ったところに玄武山普済寺がある。普済寺は南北朝時代、今から六〇〇年以上も前に開創された歴史ある寺だ。だが、今日は寺を見に来たわけではない。和尚坐像などの重要文化財を見に来たわけでもない。ただ、お寺の裏側、西側の墓所を突き抜けたところから広がる中央線とそれにクロスする奥多摩バイパスが見たかったのだ。オレンジ色の電車がゴオゴオと通ると、まるで谷内六郎の絵のような童話的風景になる。

墓所の端が、斜めになる。だから逆に言うと中央線の電車に乗っていると小さな丘の上に普済寺が見える。雨にけむり、その雨を避けもしないで鳥が翼を広げている。奥多摩バイパス沿いに団地が並ぶ。夕暮れにもなると、その家々に灯がともるだろう。「墓地通り抜け禁止」と立て札が立っているから、あまり大きな声では言えないが、ぶらっと眺めるにもってこいの場所だ。

＊　＊

今月から『ぐるり立川』がスタートします。思いつくまま、気の向くままに好きな場所、お気に入りの景色を紹介します。どうぞよろしく。

（東畠弘子）

ことわざ問答 1

漢字一字挿入せよ

▼頭のうえの●を追え

▼黙り猫が●を捕る

4月15日(日)「あるけあるけ運動」

集合●立川練成館8:00予定

※詳しくは☎[illegible]－6711・伊藤さんまで

表紙は語る

まい あーと■押花
「花帽子の少女」by 伊藤 令

花びらのひとつひとつがキラキラと輝きながら、花の愛らしさ、やさしさを表現した押花。また、ときに懐かしさをも蘇らせてくれる。

今月の表紙を春らしく飾ってくれたのは、羽衣町2丁目にお住いの伊藤令さん。たまたま足を向けたご近所、そこで出会ったステキとしか言いようのない押花に魅せられ、早3年。「私自身とても花が好きで、そんなところから色の変わらない、生き生きした押花を見まして、やってみたいと、始めました。一枚一枚丁寧に水分を取り、急速脱水したのち真空状態になるように密閉して額などに入れます。すると奇麗な色のままで保存が出来るんです。忙しい生活の毎日ですから、花を観ながらのひとときはとても快適な空間です」と語る。

ハンドベルの児玉さん逝く

ハンドベルの指揮者として、日本は勿論のこと英国、米国など広く活躍してきた児玉勝己氏（上砂町）が3月8日心筋梗塞のため永眠されました。氏は立川市民会館でのコンサート（88年）をはじめとして市民の間にも親しまれ、「エコーハンドベルリンガーズ」を率いてのカーネギーホールでの演奏は内外から高く評価され、世界に羽ばたく音楽家として注目されておりました。ここに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

鳥も生活革命？

重いコートも身体から離れ、春うららのある日、曙町2丁目にあります曙橋信号を渡ろうとした時のことです。

見あげれば、木の上に鳥の巣ひとつ。当り前ですが、巣のなかは小枝や草がたくさんつまっておりました。そこにキラリと陽に光るものがあるのです。よくみれば、それはビニールでした。立川の小鳥たちも、今年は「近代化」して生活革命をおこしたのでしょうか。

立川・トピックス

？立川クイズ

これは立川のあるお年寄りがつぶやいていた「方言」まじりの会話です。さて、この人の云いたいことを「標準語」に訳して下さい。

「井上さんちゃらがじゃあ、やなさってのうぶすな山のお祭りにゃあ、うちじゅうでおめぇりに行くだぁよぉ。おめぇも一緒にやぁべぇっていわれたぁけんど、あらぁーどうすんべぇかと、かんげぇてんだぁよぉー」

（3月号の答） 多摩の一寒村に過ぎなかった立川で「山の学校」と呼ばれていたのは市立第二小学校です。今の二小からは考えられない昔日ぶりです。昭和4年まで立川には小学校が一校しかなく（一小）、「当町ハ近年著シキ発展ヲナシ人口ノ増加ニ伴ヒ就学児童年々激増シ」（当時の議事録）と三田鶴吉著『立川飛行場物語』に記されております。当時の「立川町」としては、大英断だったにちがいありません。

真如苑だより

桜咲き、春爛漫の季節になりました。「爛漫」とは、パッと明るい感じをあたえる様子、と字引きにでておりました。境内にも春いっぱいの真如苑へ一度お出掛けください「明るい感じ」をお届けいたします。

■日時　4月18日(水)　午後2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

ことわざ問答 答

黙り猫が鼠を捕る

大言壮語する[illegible]な人の方が実行力があるという例え。

頭のうえの蠅を追え

他人の世話をやくより、まず自分のことをきちんとしなさい。

東風

ひとつの街に管弦楽団があるなんて、なんと素敵なことだろうか。それも、職業的に生々しいプロ集団ではなくアマチュアであることが好もしい。立川管弦楽団は立川高校のOBが母体となって発足、常任指揮者の古谷誠一さんもまた立川高校から東京大学文学部へ進み、指揮者にまでなった異色の人。■去年の「立川人・展」の会場に管弦楽の「管」のひとが九人も来て演奏してくださった。演奏の合間に奏者の「本職」が紹介され、当り前のことだがそのバラエティの豊かさに微笑んだものだった。ホルンの上村康司さんは築地の魚河岸で働いている。■今号の取材で立川駅を五時二十分に発って築地へ赴いたが、六時をとうに回っていて、すでにセリは終っていた。話を聞くには絶好の時間帯だったが、この時すでに「ひと仕事」終って、それでもなお、魚河岸のなかはむんむんとした熱気に覆われていたものだ。業者ばかりが客の食堂で「鯵のたたき定食」を御馳走になりながら、上村さんの管弦にかける、熱い想いを聞いた。どんなに疲れていても、酒席で遅くなった夜にでも、一度は必ずホルンに息を通すのだという。■四月二十二日は多摩教育センターホールで第二十二回目の定期演奏会でブラームスの「交響曲第一番」などの演奏。心ひとつにと願ってきた管弦の音がこの街に響く。■わらべらに天かゞやきてえくてびあん。

（編集）石塚敦美　小川知子　神山清子　隅川理
山田恵子　中村絵里　半沢正弘　原田悦子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治
スタジオ269　枝川一巳　本多修

月刊えくてびあん　第69号
平成二年四月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビュー・ハイツ501　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　(株)大廣社

第10回

我家は3代目

老舗といい暖簾の重みという。それも３代つづけば語り尽くせない物語があろう。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそここここに隠されている。

時は移れど和装ひとすじ

丸屋（曙町2丁目）

明治33年、伊藤平吉によって創業される。立川駅北口前で店を構えていたが、区画整理で移転、現在は伊勢丹百貨店の中にある。だが、丸屋はテナント出店ではなく堂々の暖簾をはる、異例の独立店舗だ。明治から平成まで日本人のファッション感覚は目覚ましく変わったが、丸屋の一貫した「呉服道」に微塵の変化もない。

換算法が刻まれている珍しいソロバン。現在も使用されている。

店長を務める良三さん。４代目としての修業にはげんでいる。

初代

2代

3代目・伊藤平八朗さん(左)、４代目・良三さんが肩を並べるとそこに「歴史の風」がそよぐようだ。初代、２代が一緒に写っている昭和12年の記念写真には「立川町仲町通り」とある。現在地(伊勢丹内)は昭和45年からの店舗。